

423
305



亞細亞大觀



雲崗點描 (山西省)

第一百五十參回
第十三輯九回

內容

雲崗の街	一
雲崗石窟の外観	二
雲崗石佛	三
中央窟の本尊	四
六朝風石佛	五
雲崗石佛	六
雲崗石佛	七
雲崗石佛	八
雲崗附近の人家	九
雲崗を語る	十



記事

雲崗を語る

三木田民安

撮影

島崎役治

發行所

大連市山縣通り一九三

亞細亞寫真大觀社

(毎月一回發行)

版權所有 不許複製

電話②六二三五
振替穴連七一八

編輯人 青山捨夫
大連市山縣通り一九三

發行人 島崎役治
大連市三河町二一

印刷人 鈴木周哉
發行所 亞細亞寫真大觀社



42
30

雲崗石佛を語る

三木田民安

北魏の太武帝は都を平城に定めた。平城は即ち今の大同であつて、都は文帝が洛陽に遷すまで置かれたのであつた。當時、印度の佛教は西藏を経て支那に傳はり、その信仰はなかなか盛んであつた。よつて、太武帝は勿論、土民の信仰は徹底したもので、數多の名僧智識も出現して平城（大同）の街には華嚴寺と云ふ寺院さへ建立され、朝夕觀經の聲は街々に牙へ渡つたのであつた。そのころ支那一流の佛弟曇曜と云ふ者、平城の西三十支里のところに雲崗があり、平和の氣充ちたところを發見して、先帝の供養の意味に於て、文帝に寺院の建立を建白し、更に石佛彫刻を謀つたのであつた。時、恰も、佛教の信仰篤い帝は、沙門の乞を許したので、此處に支那當代一流の名工等が集つて曇曜と共に佛像の彫刻に手をつけたのであつた。以來彫刻の手を進めること約百七八十年、漸くにして現存の石佛が出来たのである。完成した佛像は、柔和な、實に佛の心を心とした容貌であつて、彫刻の精巧、表現の妙は、現代美術家のただだ驚くばかりで、到底眞似の出来ない偉大な作ばかりである。

今、その石窟を見るに、雲崗の東西兩端に二窟づつの洞窟があり、これを第一區と稱してゐるが第二區は中央部にある九窟の稱である。第二區石窟は石佛寺の境内にあつて、石窟の前には大規模の四層樓と三層樓とがある。第三區と云はれてゐるのは、雲崗の西に寄つた石窟七個の洞窟であつて、此處には脇佛龕があり、三つの大きな露出佛がある。更に幾百の石窟が穿たれて、その中には、幾百千の佛像が種々さまざまな形で彫刻されてゐて、二百年足らずの歳月で、よくも斯る多數の佛像の彫刻が出来たものと思へば驚かざるを得ないのである。然も、その佛像が、何れも美術的價值を多分に有してゐることを思へば、如何に工人が精魂を打ち込んだかが窺はれるのである。その精魂も、宗教の力であり、信仰の力であつて、斯くも強い信仰心を起させた佛教の力の偉大さには驚くより他はない。

若し、大同附近に旅する者があつたなら、その佛教の如何に拘らず、一度は杖を曳いて、佛教盛んなりしころの大同文化の精髓に觸れて雲崗の石佛寺で、目を樂しましめ、心の塵を拂ひ身を清淨にすることも、決して無益なことではあるまいと思ふ。

雲

大同から西三十支里、朝、馬車に揺られて雲崗に向へば、夕陽落ちるころ、遙か彼方に雲崗が迎えて呉れる。その雲崗が石佛寺の存在するところだ。雲崗の下に部落がある。その部落が、寫真に見る通りの雲崗の街である。なだらかに丘

(大亞細亞)

雲崗

これは雲崗にある第二十窟の露出佛の姿である。元は、他の佛像と同じく石窟内にあったものらしいが、その石窟が、千数百年近い時代に風化し崩壊したために、後方僅に洞窟の跡を残したままに崩壊したためである。石

(大亞細亞)

雲崗石窟の外観

(省西山)

この窟は、大同の西、三十支里のところにあり、北魏の時代に、この窟を造らせた。窟の内部には、佛の坐像が、千数百年の間に、風化し崩壊した。窟の外には、佛の坐像が、千数百年の間に、風化し崩壊した。窟の外には、佛の坐像が、千数百年の間に、風化し崩壊した。

(印畫の複製を禁ず)

(二の回九の輯三十觀大亞細亞)



42
30



雲崗石佛
(一)

これは雲崗にある第二十石窟の露出佛の姿である。元は、他の佛像と同じく石窟内にあつたものらしいが、その石窟が、千數百年近い時代に風化し崩壊したために、後方僅に洞窟の跡を残しただけになつてゐるのである。石佛は、寫眞に現はれてゐる如く座像であるが、その大きさは四十尺に近いものである。その柔和な容貌は、大同特有のものらしく、大同の住民が、柔和であるのも、或はこの佛像に感化されたのかも知れない。

(印畫の複製を禁ず)

(三の回九の輯三十圖大亞細亞)

(印畫の複製を禁ず)



(尊本の窟中央) 佛石崗雲
(二)

これは雲崗中央の大きな洞窟内に安置されてある釋迦の本尊である。この本尊のある洞窟は、東西十二メートルと南北十八メートルあつて、座像本尊の高さも十八メートルある。その大慈大悲の顔貌は支那にある彫刻中でも第一位にあり、その周圍に刻まれた大小の佛像、佛龕は、釋迦本尊の偉容と壯麗さを物語つてゐる。

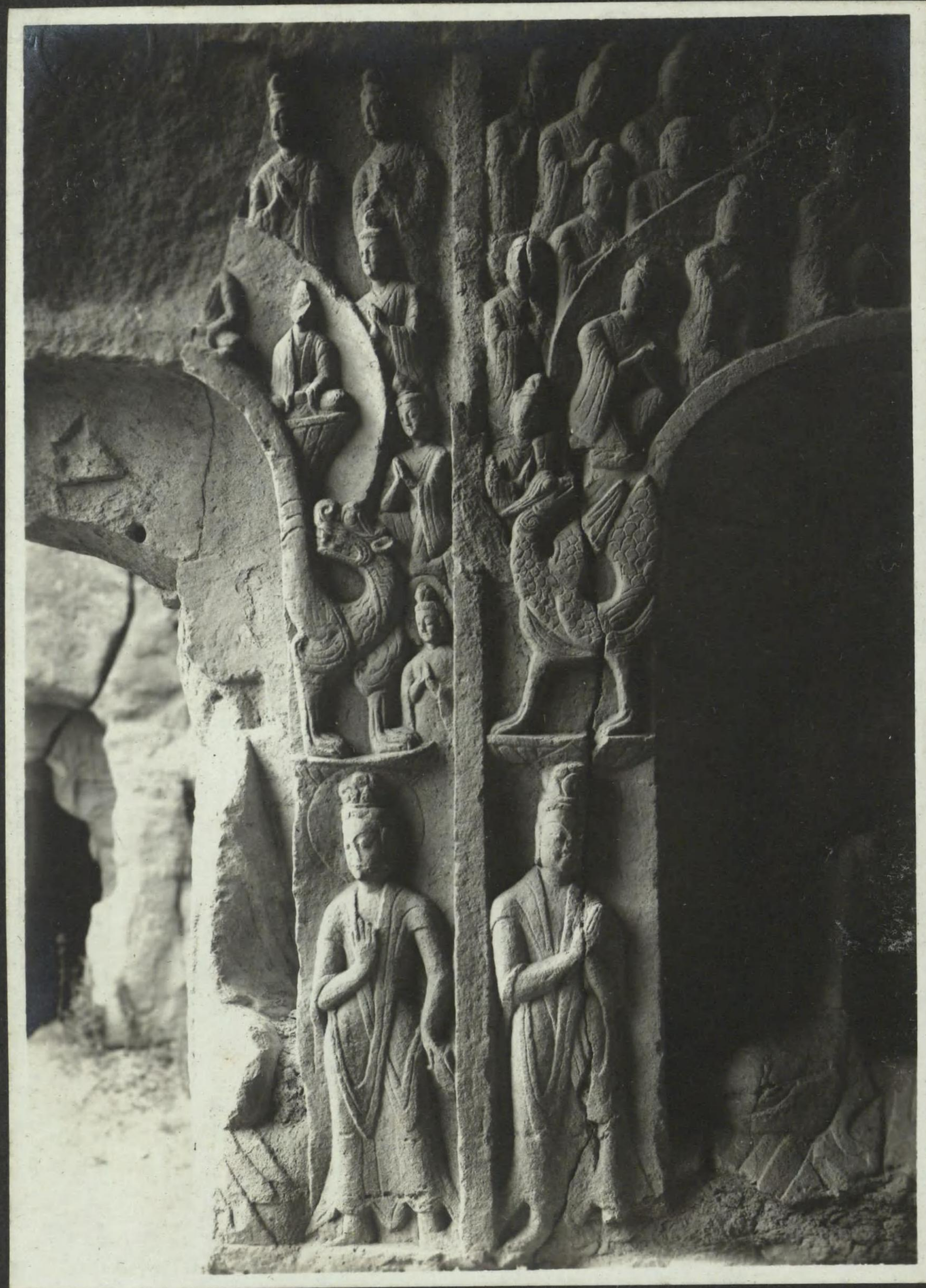
(印畫の複製を禁ず)

(四の回九の輯三十觀大亞細亞)

この寫眞は雲崗に現存せる石佛ちう

亞)

42
30



雲 崗 石 佛
(三)

この寫眞は雲崗に現存せる石佛ちうで、六朝風を最も鮮に表現した代表的石佛である。北魏の昔、宗教の力とは云ひながら、斯くも名工が在つて刻したものとせば、ただただ驚くの他はない。

(印畫の複製を禁ず)

(五の回九の輯三十觀大亞細亞)

雲

これは小石窟内の釋尊の像である。この石窟の佛像に本尊を始め、石壁に刻まれたもの

細亞)

佛石崗雲

(六)

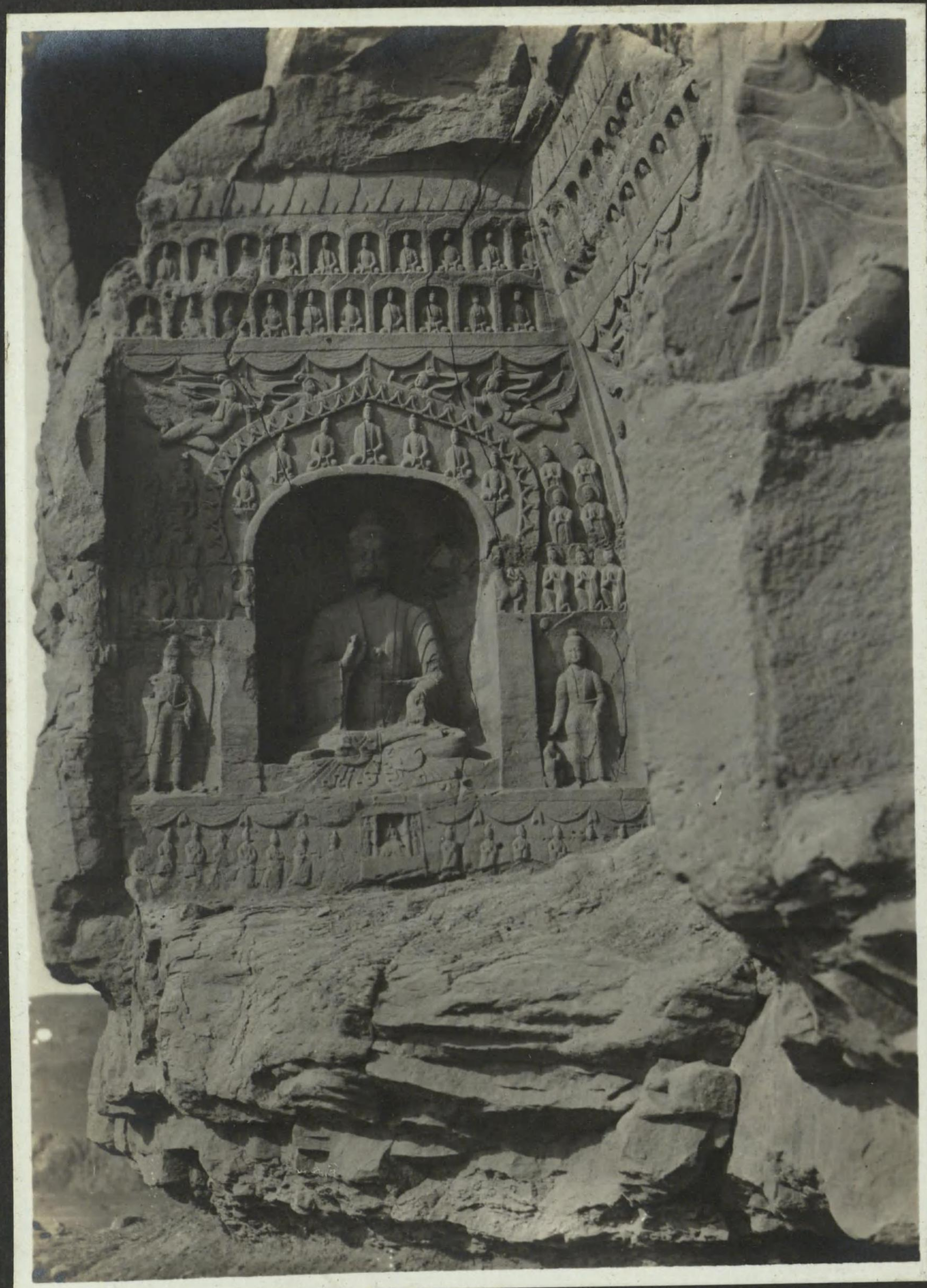
これは石窟内にある不動尊の像である。石刻ではあるが、まるで火がいきいきと燃えるやうな態を現はしてある。余程の名匠の作であらう、本尊の足下に立つてゐる佛像は、六朝風に見える、頭上の欄間に刻んだ佛像達は何か歡喜に充ちた風采と恰好である。その他の裝飾的彫刻もなかなか美麗で大同文化を表現してゐる。

(印畫の複製を禁ず)

(八の回九の轉三十觀大亞細亞)



42
30



雲 崗 石 佛
(七)

これは小石窟内の釋尊の像である。この石窟の佛像に本尊を始め、石壁に刻まれたものとして六朝風であつて、その彫刻の精巧で判然としてゐるところは、古代美術の参考となる点に非常が多い。周囲の石壁は雨に叩かれ、風が吹かれ、天日に晒され、霜にねられて風化破壊したところも多いが、この六朝風だけは少い。この欠損もなく、千數百年前の佛教美術を現存してゐるのである。

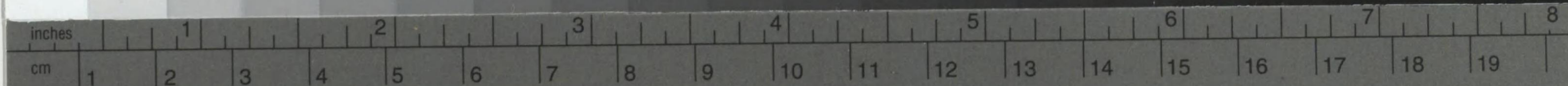
(印畫の複製を禁ず)

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

